

研修名 乳児保育の環境 乳児への適切な関わり
乳児の発達に応じた保育内容

平成 29 年 11 月 27 日（月）10：00～12：30

講演 「ていねいなまなざしでみる乳児保育」

講師 東京家政大学 ナースリールーム主任保育士
井桁 容子 氏

1 講演要旨

1) 人間が人間らしく育つには？

①今の日本は、大人の言う通りにしないと生きていけない。

- ・子どもには育つエネルギーがある。
- ・「はだかの王様」の話が成り立たない世の中になっていることに大人が気付くべき。

②プロの保育者とは

自分が未熟であることに気付いて、子どもを何とかしようとする気持ちを持つ。

- ・養護的な関わりが機械的になっていないか？

鼻水をすぐに拭くのは子守り。鼻水が出ていることに気付かせ反応を待つ。

待つことで育ちが違ってくる。（受容的、応答的な関わり）

- ・子ども同士のトラブルにすぐに大人がジャッジをしていないか？

止めるだけが目的ではない。どうすれば良かったか相手の気持ちも考える。

相手の気持ちを考えようとするすることで、心が育つ。

- ・着替えの時には、ただ脱がせていないか？

ただ脱がせるのではなく、いずれ自分で出来るように援助していくのが教育。

2) 今の日本の社会状況は

①・一人一人の違いがなくなってきている。みんな同じならロボットでいい。

- ・小学校で座ってられない子が増えている。幼児期に何かがあったのでは？

- ・今の母親は、子どものダメな所を直そうとする。

- ・人の言いなり、大人の顔色ばかり見ている子ども。



困難を乗り越えて、生きていける問題解決の力や、答えのない問題に協同で

立ち向かい、「正解」ではなくその都度『最適解』を求め続ける力を育てていく。

《その場に応じて考えられる力》

②ジェームズ・ヘックマンの研究より

- ・乳幼児期に高い保育や教育を受けた人が幸せになっていると言う研究結果より
有能な保育者が子どもを幸せにできる。

- ・学力への考え方

問題の解決や発見に向けて、主体的・協動的に学ぶ学習を導入。

その人らしさやオリジナリティーを出せる人を学力が高いとする。



みんな違っていい。一人一人の思いを尊重することが、保育世界の改革！
覚えることより、理性や知性。自分の手足で感じることでもっと知りたい意欲へ。

3) 新保育指針のキーワード

保育者主体の指示型では、子どもは育たない。

- ・受容的な関わり
- ・応答的な対応
- ・温かく受容的、応答的に関わる

4) 乳児保育では

集団保育だから、との発想は間違いで大人の都合である。一人一人の授乳や食事、午睡時間を見計らうことで、心の安定へと繋がる。

『食事』

- ・赤ちゃんの味覚は敏感。
- ・頑張って食べさせるのは、保育士の自己満足。
- ・幼少期の記憶はいつまでも残っている。→好き嫌いの原因に。

『睡眠』

- ・睡眠時間は個人差があるため、一律とならないように。
- ・眠い時に眠いと言えるような環境。

5) 保育の中にある教育

- ①・自発的な遊びの中に学びがある。
 - ・表現愛・子どもの行動には意味がある。最初からダメだと決めつけない。
 - ・生きることを豊かにするため、意欲を育てる。



保育者が養護の中に教育的配慮をすることで、学ぶ意欲や心が育つ。

②人として豊かに生きることが意欲や学ぶ力が育つ環境

- ・信頼してもらえる安心と安全な環境。
- ・自分の思いを表現できる環境。
 - 自分の思いと共に相手の思いも大切に。
- ・経験や失敗をしながら学べる環境。
 - ぶつからない子にするのではなく、ぶつかった時にどうしたら良いか考えられる。
- ・科学的な根拠を持って共感してもらえる大人の存在。

2 感想

今回の研修を受けて、今まで自分では感じていなかった日本の社会で起きている危機的な状況について知りました。技術の進歩により様々な機械やロボットが出てくる中で、生き物である人間が持っている心の意味、心や意欲を育てる重要性、また乳幼児期に子どもと関わる保育者の役割について改めて考えさせられました。子どもの行動全てに思いや意図があることを意識しながら、意欲や心を育てられるような言葉かけや関わりができるように、また一人一人の良いところを見つけて伸ばしていけるように自分自身の保育を見直していきたいと思います。

(記録 京丹波町立上豊田保育所 黒川生子)